

RILAS 研究部門「知の蓄積と活用に向けた方法論的研究」部門共催

## 『芦別 —炭鉱〈ヤマ〉とマチの社会史』刊行記念シンポジウム

Symposium on publication of  
“A Social History of Ashibetsu: Coal Mines, Migration, and the Town”

嶋崎尚子・西城戸誠

本特集は、産炭地研究会による『芦別 —炭鉱〈ヤマ〉とマチの社会史』（嶋崎尚子・西城戸誠・長谷山隆博編、寿郎社、2023年、B5判340頁並製（口絵52頁）、定価4000円＋税 ISBN978-4-909281-56-2）の刊行記念シンポジウムの記録である。

本書刊行の背景と特性を概説しておく。産炭地研究会は、2008年から国内・国外の産炭地を対象に、社会学ならびに経済史の視点から石炭産業史、炭鉱での労働・仕事、地域社会の動態に関する調査研究活動を進めている。周知のとおり、日本国内の石炭産業は、1950年代初期に戦後の最盛期をむかえたものの、1950年代後半には衰退局面に転じ、長期間を経て2001年度末に終焉した。それゆえ産炭地研究会の研究活動は、あまりにも遅い。しかしわれわれは遅いがゆえに、これまで看過されてきた石炭産業の衰退期における「ビルドアップ」、その後の最終的な閉山の実態を記述し、説明するという使命を担っている。なぜならば、産業に関しては、当該産業の発展期や最盛期には社会で注目され、おのずと調査研究も蓄積されるが、ひとたび衰退局面に転ずるや、すぐさま関心は失われ、終焉を待たずに忘れ去られるからである。石炭産業はその典型であり、実際、1990年代まで残った炭鉱や産炭地の最後の動向については、記録も研究も蓄積されていない。

そこでわれわれは、道央の空知炭田に位置する芦別市を対象に、大手三井炭山の道内最後の炭鉱となった三井芦別炭鉱に焦点をあて、地域史を編むことにした。具体的には、1953年の芦別市制施行以降を中心に、炭鉱会社のビルドアップとしての苦闘の過程、1992年の閉山、その後の現在までの産業・社会構造の変容を記述する。その際、多くの人たちが芦別に転入し、人口の最盛期を迎え、その後、人びとが去っていく移動過程に着目した。その結果、「芦別五山」を有する炭鉱のマチから、製造業・サービス業を中核とする地方都市へと変容する芦別の社会史が描出された（詳細は本稿末の目次を参照されたい）。

本書の特性は2点ある。第一は、本書で用いた史料・資料である。「芦別五山」の会社・労組関連の一次史料・資料のほとんどはすでに散逸しているため、本書では、芦別の星の降る里百年記念館の収蔵資料を主材料とした。同館は、芦別五山のみならず芦別市内の諸組織による刊行物など多様な資料を、網羅的に整理・収蔵している。その豊富さは、他に比肩すべきがなく、唯一無二の「地域博物館」である。この資料群を構築した人物こそ、本書編者の一人であり、同館前館長の長谷山隆博さんであった。彼は、考古学が専門の学芸員であるが、1993年の同館開設にあたって「芦別のことは全部知っている人」になろうと決意し、長い期間をかけてそれを実現した。われわれは膨大な資料をもとに、長谷山さんと議論を重ねて、本書の刊行に至った。大変残念なことに、長谷山さんは本書刊行の喜びもつかの間、2024年2月9日に逝去された。ここに長谷山隆博さんのこれまでのご功績に敬意を表し、心からご冥福をお祈りしたい。

本書の第二の特性は、地域史としての価値である。本書は学術書であるとともに、芦別の記録集である。とりわけ冒頭に掲載した「写真記録 昭和の芦別」100枚は、詳細なキャプションを付けることで、秀逸な写真集



となった。芦別に移入し、生活し、そして去っていった膨大な人びとの「懐かしいアルバム」でもある。本書は北海道の出版社にこだわり、寿郎社から大判（B5）でかつ巨大な「芦別」と記された強いインパクトの装丁本として刊行した。幸いなことに、われわれの企図以上に多くの方々が手にとってくださり、重版に至っている。

さて、2024年3月3日に開催した刊行記念シンポジウムは、本特集に掲載する3論考のもととなった基調講演とコメント2本というプログラムであった。講演は、本書1章執筆者の島西智輝さんによる「芦別の炭鉱〈ヤマ〉—ローカル・ヒストリーから見る近現代日本—」である。経済史の視点から「産炭地芦別」を「近現代日本の地域史、および石炭産業の歴史をグローバルな動向と関連づけ」て整理した論考で、本書の前史と位置づけられる。つづくコメントは、道内産炭地域の博物館学芸員である持田誠さん（浦幌町立博物館）から「芦別の記憶を形に残す博物館の役割」、井上博登さん（赤平市炭鉱ガイダンス施設）から「『芦別調査』のもたらしたもの ～地域史とその解釈の交錯する地点」としてお話しいただいた。

なお、当日は、不本意ながら長谷山さんを追悼する場ともなったが、会場とオンラインを合わせて130人を超える方々にご参加いただき、心温かい時間であった。荻原貢芦別市長をはじめ、本書刊行ならびにシンポジウム開催にあたってご理解・ご協力くださったすべての方々に感謝申し上げる。

◆開催日時：2024年3月3日 13:00～15:00

◆開催場所：芦別市立図書館ホール、オンライン併用

◆主催：産炭地研究会（JAFCOF）

◆共催：芦別星の降る里百年記念館、芦別市立図書館、早稲田大学総合人文科学研究センター

◆プログラム

1. 開会：西城戸誠（早稲田大学）
  2. 挨拶：嶋崎尚子（早稲田大学）
  3. 来賓挨拶：荻原貢芦別市長
  4. 執筆者紹介：笠原良太（実践女子大学）、坂田勝彦（群馬大学）、島西智輝（立教大学）、清水拓（早稲田大学）、新藤慶（群馬大学）、中澤秀雄（上智大学）
  5. 基調講演「芦別の炭鉱〈ヤマ〉 ローカル・ヒストリーから見る近現代日本」：島西智輝（立教大学）
  6. 本書へのコメント1 持田誠（浦幌町立博物館）
  7. 本書へのコメント2 井上博登（赤平市炭鉱ガイダンス施設）
  8. 質疑（講演者、コメンテーター、会場参加者）
  9. 故長谷山隆博氏追悼動画上映
  10. 閉会挨拶：中澤秀雄（上智大学）
- 司会：西城戸誠（早稲田大学）

◆参加者：132人（会場105人、オンライン27人）

## 『芦別—炭鉱〈ヤマ〉とマチの社会史』目次

はじめに

写真記録 昭和の芦別

[芦別の炭鉱と労働者の移入・定着・移出]

第1章 石炭と電力のマチ——国産エネルギー供給地としての芦別の歴史

【コラム1】芦別の中小炭鉱

【コラム2】ヤマを開発した実業家・投資家たち

第2章 ビルド鉱三井芦別の人員確保と労働者の定着

【コラム3】三井芦別の社宅建設と炭住街の形成

第3章 ビルド鉱の衰退と閉山——芦別を去る人・留まる人

【コラム4】改良住宅への建替えと炭住生活の変貌

第4章 樺太引揚者の足跡から辿る戦後の芦別と石炭産業

【コラム5】炭鉱間移動と「ヤマの仲間」

第5章 炭鉱の学校と子ども

[芦別における炭鉱労働]

第6章 三井芦別炭鉱での仕事

【コラム6】明治期の炭鉱開発と炭鉱労働者

【コラム7】戦時下の炭鉱開発と炭鉱労働者

第7章 災害報告から読む三井芦別炭鉱の事故

【コラム8】三井芦別の労働生活

【コラム9】石炭運送と鉄道

第8章 三井芦別労働組合と精妙な賃金体系

【コラム10】三井芦別と北日本精機

[芦別の地域産業と地域活動]

第9章 炭鉱町から地方都市へ——戦後芦別市の地域産業構造と社会移動の変遷

【コラム11】芦別支店、芦別営業所、芦別鉱業所

第10章 芦別で働いた人たち——芦別出身者と転入者の比較を通して

【コラム12】炭鉱全盛期の飲食店

第11章 芦別の女性たちの組織活動——主婦会・婦人会、生活学校を中心として

【コラム13】炭鉱と農業——炭鉱周辺の農業従事者

終章 炭鉱は芦別に何を残したのか——まとめにかえて

あとがき

年表

索引

当日の様子

① 会場



② 挨拶



③ 基調講演



④ コメント1



⑤ コメント2



⑥ シンポジウム会場前に設けられた写真「昭和の芦別」展示エリア

